

巻頭
言

石原慎太郎のお墨付き



| 会長 山崎 學

石原慎太郎が逝った。脳梗塞2回、すい臓がんと闘いながら最後まで執筆活動を続けての大往生。見事な生きざまだったと思う。1955年「太陽の季節」でデビューした時からのファンである。高校生時代にこっそり書店で購入して興奮した挙句に障子を突き破れるかと試したが、不肖の息子では突き破ることができず、しばらく得体のしれない敗北感にさいなまれたことを今でも覚えている。

石原は神奈川県立湘南高等学校1年時に学生運動に共鳴して民主学生同盟に入り、学内で社会研究会を作り、日本共産党に入党することを目指したが、母から覚悟のほどを詰問されて翻意している。19歳で山下汽船に勤務していた父潔を脳溢血で亡くし、山下近海汽船社長の二神範蔵の勧めもあってできたばかりの資格であった公認会計士を目指して一橋大学に進学する。しかし会計士に向いていないことに気づいて、休刊していた一橋大学の同人誌『一橋文藝』の復刊に尽力する。同人誌は出来上がったが、印刷所に支払う費用に事欠き、講演で知り合った伊藤 整から8,000円ほどの援助を受けて無事に復刊する。創作活動を始めて同人誌に発表した処女作「灰色の教室」は文芸評論家浅見 淵に激賞され注目を浴びる。第2作目「太陽の季節」で文學界新人賞、芥川賞を受賞し、文壇に颯爽とデビューを果たす。大学卒業後に映画監督として東宝に入社するが、1日で辞め、その後作家活動に専念する。1956年に雑誌『文學界』4月号でこの新鋭作家と対談した三島由紀夫はエトランジェ（異邦人）と礼賛した。

昭和20年敗戦時に12歳だった石原の脳裏にあったのは敗戦、占領、GHQの洗脳政策で国家としての自信を失っていく祖国の姿に対する憤怒だったのかもしれない。1968年、第8回参議院通常選挙で全国区自由民主党公認として立候補し、301万票という大量得票で当選する。1972年、参議院議員を辞職して衆議院選挙に旧東京2区から無所属で出馬して当選。1973年、日中正常化に伴う中華民国との断交に反対して自由民主党に派閥横断的に衆議院26名、参議院5名からなる、自身が名づけ親になった青嵐会を立ち上げる。

代表世話人に中川一郎（当選4回水田派）、藤尾正行（当選4回福田派）、湊 徹郎（当選4回中曽根派）、渡辺美智雄（当選4回中曽根派）、事務局長に浜田幸一（当選2回椎名派）、幹事長に石原慎太郎（当選衆議院1回）で執行部を作り、加藤六月（当選3回福田派）、中尾栄一（当選3回中曽根派）、中山正暉（当選2回水田派）、森 喜朗（当選2回福田派）、綿貫民輔（当選2回椎名派）、野田 毅（当選1回中曽根派）、三塚 博（当選1回福田派）、山崎 拓（当選1回中曽根派）といったその後の政界を動かす面々が血判を押して参加している。

その後、中国共産党に対する強硬論に反対して山崎 拓、野田 毅、綿貫民輔らが脱会し、1977年、中川一郎が農林大臣に就任すると、中川・渡辺の対立が表面化する。1978年、福田内閣で日中平和友好条約が国会に上程されるとその是非をめぐる親台湾派と批准派が対立し、中

川派旗揚げ、椎名派交友クラブ解散、1979年、青嵐会は消滅するに至る。

1975年3月、衆議院議員を辞職して同年4月東京都知事選挙に出馬するが、落選。1976年12月、衆議院議員に返り咲くと福田赳夫内閣で環境庁長官に就任。1987年、竹下内閣で運輸大臣に就任。1989年8月、自民党総裁選挙に出馬するが海部俊樹に敗れ、1995年4月、議員辞職をする。1999年4月、東京都知事選挙に出馬して当選する。4期在任中の2012年10月、都知事を辞任し、2010年4月に立ち上げた「たちあがれ日本」を改称し「太陽の党」の共同代表に就任。さらに11月「日本維新の会」と合流して代表に就任。同年12月、第46回衆議院議員総選挙で比例東京ブロックに出馬し当選して17年ぶりに国政復帰を果たす。2014年、第47回衆議院総選挙に「次世代の党」の比例単独最下位で出馬して落選し、政界を引退する。

私は天命を知るといわれている50歳からヨットにはまった。週末は逗子マリナーに係留していた28フィートのヨットでヨット歴30年の友人に教わる海の生活は、山国育ちの私にとってとても新鮮だった。ヨット競技に参加するわけでもなく、夏は引き釣りで相模湾の新鮮な魚を漁り、冬は厚手のライフジャケットを着けて喫水に届くくらいに帆を張り、船を傾けてスリルを楽しんでいた。引き釣りの釣果は浄妙寺近くで開店した鮎屋に持ち込んで握らせた。

石原慎太郎元都知事との出会いもその鮎屋のカウンターだった。隣り合わせて話しているうちフランス製のベネトウ社の舟艇を所有していることや福田赳夫先生に可愛がられていたことから話が弾んで意気投合し、あげくに知事は長酒で腰を抜き「普段はこんなに飲むことはないんですよ、よほど楽しかったのでしょうか」と典子夫人に抱きかかえられながら帰っていった。釣果を勧めると「最近の相模湾の魚は油臭くなった」と言いながらよく頬張った。その後も何回か飲む機会があり、都知事室での昼食を誘われたが、鮎屋の酒飲み相手が分相応と思い都庁に向くことはなかった。そのうち、石原元都知事は逗子から東京に自宅を移して、鮎屋を訪れることもなくなった。最後の頃に「頭医者はおかしな医者が多いがお前は結構まともだな」と頬を緩めてポツリと言われたのが最後になった。

「葬式不要、戒名不要、我が骨は必ず海に散らせ」の遺言を残す。

でも戒名は海陽院文政慎栄居士。あの世で怒っている顔が目浮かぶ。